

子どもが輝きをとりもどす居場所づくり レポート

かがやきは、自分のなかにある

# もくじ

はじめに	1
初回ワークショップ - 集まった、17名の勇者たち -	2
表現するってどういうことか 子どもと保育研究所ぶろほ 所長 山田 眞理子さん講話	4
最終回ワークショップ - 子どもが輝いた日 -	6
この取り組みの評価について	8
保護者の声から	9



この事業は、2018年度ドコモ市民活動団体助成事業からの助成を受けて実施されました。

## はじめに

「居場所」とは。

ありのままの自分をさらけ出し、肯定的に受け入れられることで、安心してくつろぐことのできる「場」と、私たちは考えています。

家庭でも学校でもない、気軽に立ち寄れてほっとでき、食事や遊び、学びを通じて地域の人たちと出会える「子どもの居場所」を、必要としている子どもたちが多くいます。

仲間からいじめを受けている、勉強についていけない、親からも振り向いてもらえないなど、さまざまな状況の中で、孤独感を抱え、自信を失い、苦しんでいる子どもたちにとって、地域での子どもの居場所は、そういう子どもたちのためには、なくてはならない最後の砦です。

「子どもが輝きをとりもどす居場所づくり」は、子どもの表現活動の専門スキルを持ち、20年余の実績を持つNPOと、子どもNPOセンター福岡が連携し、福岡市内西部地域の居場所に集う子どもたちの参加を得て実施されました。

参加者は3歳から小学6年生まで17名、その中には、社会的養護の元で暮らす子どもたち5名がいました。

臨床心理士や子どもの表現に関わる専門家のスーパービジョンのもと、これをモデルとして、各地に広げていくことを目指しました。

自己表現とコミュニケーション力を育成するためのワークショップ、及びその指導者となる人材の養成を通して、子どもたちに自信と誇りを取り戻し、困難に負けない力を培っていかうとする今回の取り組みは、まだ、その一歩を踏み出したばかりです。2年目、3年目と確実に実施場所を広げていけるように、今後も進めていきたいと思っています。

## 初回ワークショップ - 集まった、17名の勇者たち

子どもが“かがやき”をとりもどす居場所づくり…いよいよ子どもワークショップが始まりました。17名の子どもたちとともに、1か月間6回を集中して取り組みます。

表現教育家の吉柳佳代子さんこと“カヨねえ”の「何でここに来たの?」の問いかけに「選ばれて来た」と応える勇者たち。



まずは、「みんな、なにをして遊びたい〜?」とアイデアを募集して、「だるまさんがころんだ!」「ドッジボール!」と矢継ぎ早に飛び出す声を全て書き留めるカヨねえ。その後は小さい勇者もわかりやすい、楽しい遊びがくりひろげられました。

はじめは知っている子やママから離れられなかった子どもも、1時間もたたないうちに、好きな果物、好きな色で知らない人と仲間になる事が出来ました。



自分の「好き」という気持ちに正直に、人とあわせたりしないでいいんだよ、何が良いとか悪いとかじゃないんだ〜って事を、カヨねえがくりかえし、声をかけてくれました。

全員でやる「だるまさんがころんだ」では、みんなでルールにしたがうことで、楽しくなることも感じられたようです。

小さい子ども達は2時間で終了。

後半の1時間は小3以上の子どもと大人15人による、より複雑なワークでした。

なんとなくみんなと同じにしてれば出来る事ばかりでなく、カヨねえの話を聞いていないと、やり方がわからず楽しめません。



5人組でひらがなや象、自転車をつくりました。

元気いっぱい男子小学生4人と青年男子の5人組は平面でなく、立体の象や自転車をみんなの身体でつくって、なんと動かしてみせました。



ドッジボールがしたい！という子どもの声に応じて、カヨねえが提案したのが、エア縄跳び、エアボール投げ。

無いはずの縄が見えたり、無いはずのボールを止めたり邪魔したり～想像力を働かせました。



全員で輪になって、手を握って信号を送るゲームでは、簡単だけど、なかなか上手くいかない～だんだん全身で信号を感じようしているのがわかりました。



目も耳も身体も、ココロもめちゃくちゃ動かして、ちょっとスッキリした顔で帰っていく子どもたち。色んな個性があるからこそ、面白いなあと感じたワークショップでした。(2019.3.30)

## 表現するってどういうことか

特定非営利活動法人子どもと保育研究所ぶろほ  
所長 山田 眞理子さん

今回の助成事業を受けて、参加する子どもたちの保護者や養育者を対象に、子どもの表現をどうとらえるか、また、子どもたち一人ひとりの違いを認めながら、大人としての関わりやサポートの在り方について学びました。

### 「息を吐く」ことが表現

人は息を吸うのと吐くのが一体になっているのは当たり前のことです。吸うばかりはできません。いくらいい空気、おいしい空気でも、「吸って～吸って～吐いたらもったいない！吐かないで！」と言いつけたら、その人は過呼吸で倒れてしまうでしょう。そういう意味では、吸う事と同じくらい、吐くことも大事です。そしてその「吐く」ことが表現になっているのです。息を吸う上では当然その空気が新鮮である事とか、清浄であることが必要かもしれません。汚れた空気を吸えば体に悪いものがあるかもしれません。良い空気を吸おう、というのは大事です。

ところが、吐く息にはよいも悪いもない。悪ければ、それはしっか

り出した方がいい。にも関わらず、私たちは子どもが表現したものに対して、「それはよくないんじゃない？」とか言っていないですか？子どもの表現というのは必ずしも絵にかいたりというだけでなく、言葉にしたり、行動に表したり、あるいは何もしない、という形でその子が自分のいろんなことを表したり、全部が表現です。「あなたの吐いている息はよくないよ」と言うなら、しっかり出してしまえばいい。「ああ今そんな空気を出したいんだね、じゃあいっぱい出しちゃって」というのが大事なのに、それは出さないで、そういうことはしないで、と言って、表現を止めていることがとても多いなあと思います。それが日本の子育て、教育において主流になっています。

### 吐いた後にしか 吸えない

子どもたちは自分の輝きを外に出せなくなっている。吸うことはとても大事です、何かを身に着けることもとても大事だけれど、じゃあ私たちはどういうときにそういういい空気、おいしい空気を吸いたいな、と思うのでしょうか。それは、吐いた後なんです。吐き出していなかったら吸えない。吐いたあとは、自然に吸いたくなる。つまり表現し、いっぱい出したあとに、その子は一番おいしい空気、大事なものを吸いたくなるのです。このことは、誰にでも共通した大前提。

吐いた後にしか吸えない。吐くの止められると、吸えなくなってしまうのです。良い、悪いではなく、表現しつくす、出し尽くすこと。そのために、大人はいろんな場づくりや手助けをしなければいけません。今回のワークショップの場もそうなわけです。同じ場にも参加しない子もいれば、参加してわーっと暴れまわる子もいます。でも、その子は今それしか表現の手段を持っていない。だとしたら、それを表現しつくした時に何が出てくるのが大事ではないでしょうか。まずは表現しつくすこと、その途中でとめないことが大事です。

### 子どもがその気になる時

どういう時にその子は表現しつくそうと思うのかというと、その子がその気になる時です。ここは、安心だ、表現しても大丈夫だ、という気になることが大事です。大人でも初めての場所では表現しないが、だんだん受け入れてもらっていると感じるようになると、自分の意見を言ってみようかな、と思うようになるでしょう。子どもも一緒です。むしろ最初は、できない自分を出そうとする。なぜならば、何それ、といわれても、できない自分を出していれば傷つかないからです。

できる自分を出したにも関わらず「何それ」と言われるとものすごく傷つくので、まずはできない自分、怒られるであろう自分を出すことで、その場がどんな場かを確認していきます。これが試し行動と言われます。そしてだんだん「ここまでできるんだよ、僕もすごいやろ？」

というのをちらりちらりと出していきます。でもそれは、子どもにとってはものすごい勝負なんですよ。チャレンジです。

それで否定されたら、ものすごく傷つくから。そういうようなかけひきを昨日も今日も見せてもらいながら、あ、この子はやっと安心したな、とか、安心したけれどまた不安になって、かけひきに入ったな、とか、そういうことをずっと感じながら見せて頂きました。

### 本気でもしもの世界を生きる

大人の役割は、子どもがその気になるための「しかける力」と「想像力」。特に今日は、「なかを想像してみたら・・・」ということに取り組みましたが、しかける力が大事です。そのときはしかける大人が、そのことを信じていなければ子どもは見抜きます。大人が本気でそれをやっているかどうかです。

お芝居をするということは、ウソをするということではありません。本気で「もしもの世界」を生きるということです。この活動では、そんなことを、お芝居を通して体験しているのです。そういう中で、大人の役割は本気になれるようにしかける力、それを信じる力を持つ必要があります。



## 最終回ワークショップ - 子どもが輝いた日 -

子どもワークショップもいよいよ最終回。1ヶ月の短い期間に6回、幼児は1時間半、小学生は3時間半という時間を使って、スタッフと共にドラマワークを体験しました。

親も参加しての体験を経て、小学生は子どもだけで、自分の気持ちを表現し、仲間の考えも受け入れる～その繰り返しから、小さなドラマを作りあげていきました。

ちょっと見には、単なるごっこ遊びに見えそうな活動ですが、その動作、言葉のひとつひとつに、その日、その時の感情が複雑に絡み、心の中での葛藤が、言葉や動作に見え隠れしました。



この日も大人も参加しての簡単なふれあい遊びから始まって、子どもだけでのリハーサルのあとは、大人を観客にした発表会。

これまでに体験した中から、まず「チームでモノづくり」。身体を使ってすべり台、消防車、掃除機、子どもの意見で天ぷら、ウンコを作りました。



2人でエアな戦いでは、波動砲よろしく離れた所からの攻撃を受け、倒れることが出来ました。相手をちゃんと見ていないと、攻撃を命中させる事も、カッコよく倒れる事も出来ません。





裏表紙にて、  
みんなの作品を  
紹介します！



全員参加のエアドッジボール、中当  
てはどこにボールがあるのか？  
迷うところもあったけど、みんな  
真剣そのもの。

最後は、年中から6年生までと  
スタッフの16人全員で、手を  
繋いで信号を回しました。1番  
元気な3年生が「3秒」と目標  
をたてました！



1回目5秒、2回目4秒、3回目3秒ちょっと～

「もう一回やらせて下さい！」の声で、4回目には3秒を達成。  
拍手と笑顔で発表会が終わりました。



お部屋を移動して、スーパーバイザ  
ーの山田先生指導で、クレパス画を  
描きました。思いっきり身体と心を  
動かした子どもたちが、今度は画用紙  
に向かって表現しました。



たった1ヶ月、6回のワークでしたが、子どもたちは、講師の  
吉柳佳代子さんはじめ、自分をそのままに受け止めてくれる大人が  
いる事に気づき、安心していろいろな顔を見せてくれました。初めて  
会った同士も、顔見知りになると、ぶつかることもありました。そ  
れもまた、のりこえるチカラを子どもは持っています。学校では、  
色んなダメに囲まれて、言いたいことも、やりたい事もガマンして  
ないかな？ 本気を出し合う機会を作らないと、子どもは未来を切  
り開くチカラをつけることが出来ません。

「また、会おうね！」と言ってくれたみんな。本当にありがとう。  
この事業を立ち上げた私たちは、子どもたちの「またね」に答えて、  
こんな活動がもっと広く地域に広がるようにこれからも取り組ん  
でいかなければならないと思います。

みんなが輝いた日を、忘れないよ。(2019.4.28)

## 取り組みの評価について

### ■描画テスト（H=家、T=木、P=人を描く）

この事業では、取り組みの効果を測定するため、HTP テストを心理の専門家監修のもと実施しました。

ワークショップ初回と最終回に、A3 用紙に「人、家、木」を自由に描き、それを比較して評価、分析を行います。

テストで描いた「家」「木」「人」の絵はそれぞれ描き手の内面を表しています。

家「描き手と家族の関係」、木「無意識の自画像」、人「自分で自覚している自画像や他人に対する感情」

ワーク前とワーク後を比較して、

○12人中7人により変化が見られました。

○H(家)T(セルフイメージ) P(対人認知)の内、

**P(対人認知)のよい変化が最も多くみられました。**

○統合度の平均点において、

**2.28 から 3.13** へ平均点が向上しました。

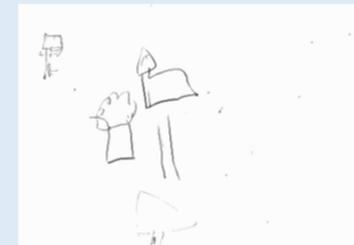
このワークが、子どもたちのセルフイメージを高め

対人認知の改善に効果をもたらすことが検証されました。

▲8歳 **ワーク前**



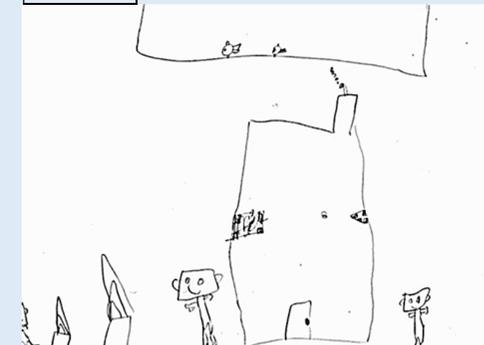
▲5歳 **ワーク前**



**ワーク後**



**ワーク後**



- 木が大きく描かれ、セルフイメージの向上が読み取れます。
- 窓やドアの数が多く、人間関係に積極的になっていることが分かります。

- 人物の表情が描かれるようになっています。
- 全体に、絵が大きくなり筆圧もしっかりしていて、よい心理状態にあります。

## 保護者・スタッフの声

・学校と施設から活動の場を広げて参加させていただき、子どもがとても楽しんで活動している姿が心に残りました。新しい人間関係を子どもがどのように築いていくのか、過程が少しわかった気がしました。毎回、活動を楽しみにしていました。違う小学校の児童、または大人との関わりを求めて、本人自身充実した時間を過ごすことが出来たのではと思います。(保護者)

・行くまでは渋々な日もありましたが、行くと楽しそうで、なかなか帰りたがらないところが印象的でした。そういえば娘は「どうせ私なんて」とか、それに似た言葉を時々言っていたのですが、最近聞かないなあ。と、今改めて気付きました。

苦手な事が多い子なので、人より頑張らせなきゃ、コツコツ日々努力それが力になる。と思って、娘にも毎日努力する人が天才なんだよ！って教えていましたが、良かれと思って私自身頑張ってるやっっているその行為が、息を吸って、吸って、限界まで吸わせているだけだと気付きました。(保護者)

・子どものつぶやきをキャッチしてワークに生かしていく、ワークショップファシリテーターのカヨねえさんの姿が印象的でした。子どもとの接し方がとても参考になりました。(保護者)

・ワークショップに参加する日は、楽しそうに生き生きとしていました。身体を使った表現がさらに好きになったような気がします。活動できる場所があり、自身を表現できるような機会が本人にとってとても良い体験だと感じました。(保護者)

・大人と一緒にワークで、子どもたちにとっては大人の失敗する姿を見られるのは貴重だった。ごまかさない大人、大人に向かって注意できるという経験は大事。(スタッフ)

・ワークの中で、身体を動かしながら声を出すというのが難しそうだった。社会的養護の子どもたちの方が声が出ていた。それはたくさんの中で自己主張しないと埋もれちゃうという背景があるのかもしれない。一人っ子たちの方がおとなしかった。(スタッフ)



発行：2019年8月

特定非営利活動法人 NPO Center for children Fukuoka  
子どもNPOセンター福岡